

# ビザンティン帝国貨幣にみえる 皇帝親子肖像問題

杉 村 貞 臣

## 序 言

ビザンティン帝国（610～1453）では、71人の皇帝が現れた。彼らは治世中に貨幣を鑄造させ、そこに自分の肖像を彫らせていた。そのなかには自分と息子の肖像を並べて彫らせる場合もあった。これを「皇帝の親子肖像」という。

ビザンティン帝国で鑄造された貨幣は、現在大英博物館を初め、バルカン半島やアメリカ合衆国の博物館と研究所に保管されている。これらの貨幣は図版の形でウロスを初め、グリエルソンやセーアなどにより紹介されている<sup>(1)</sup>。

本論文ではグリエルソンの図版に基づいて考察を進めたい。彼は皇帝親子肖像を彫らせた貨幣を紹介しているが、その一例をあげると次のとおりである。



274



769



774



左図<274>上にはヘラクレイオス帝と息子コンスタンティノス、中央<769>には上にテオフィロス帝下に息子ミカエル、右図<774>下にはバシレイオス1世と息子コンスタンティノスの肖像を、それぞれ彫らせている。

ではこれらの貨幣において、各皇帝は親子肖像を彫らせることによって何を意図したのか。特に皇帝は皇帝位の継承について、何らかの姿勢を示そうとしたのではないかという問題が起こる。

本論文ではこうした問題点に立ち、皇帝自身がもつ皇帝位継承観を考察しようとするものである。

なお皇帝の親子肖像をとりあげた先行研究はないので、研究史の叙述は省略する。

## 1. 皇帝親子肖像の実例

グリエルソンは1527個のビザンティン貨幣の図版を収録しているが、そのなかには16人の皇帝について、その親子肖像の例をあげている。いま各皇帝ごとに親子肖像の実例を見ていくと、およそ次のとおりである<sup>(2)</sup>。なお文中の< >内の数字はグリエルソンの用いた図版の番号である。

### 1. ヘラクレイオス帝(610-641)の場合

ヘラクレイオス帝は即位直後にエウドキアと結婚し、息子コンスタンティノスを得たので、早速613年から629年にかけて親子肖像を貨幣に彫らせた<272, 273, 274, 275>。帝は妻死亡の後マルティナと再婚し、彼女との間に11人の子を得た。その一人ヘラクロナスも632年から638年にかけて貨幣に登場し、ヘラクレイオスと息子コンスタンティノス、ヘラクロナスの3人が親子肖像として貨幣に彫られた<276, 277>。

### 2. コンスタンス2世(641-668)の場合

コンスタンス2世はその治世半ばより親子肖像を貨幣に彫らせ始めた。すな

わち 654 年から 659 年にかけて、まず皇帝と長男コンスタンティノスの肖像を彫らせ<284>、ついで 659 年から 668 年にかけて、皇帝と長男コンスタンティノス、次男ヘラクレイオス、三男ティベリオスの計 4 人を貨幣の表と裏を使って彫らせている<285, 286, 287>。

### 3. ユスティニアノス 2 世 (685-695, 705-711) の場合

ユスティニアノス 2 世は 2 度にわたり統治したが、695 年から 705 年までの 10 年間は流されて黒海北岸のケルソヌスで暮らしていた。その間に当地のカザール族の娘と結婚し、息子ティベリオスを得た。皇帝は 705 年コンスタンティノポリスに帰り、再度即位した。この時皇帝は貨幣を鑄造させ、そこに皇帝と息子ティベリオスの肖像を彫らせた<302>。

### 4. レオ 3 世 (717-741) の場合

レオ 3 世は 720 年から 741 年に至る間に鑄造させた貨幣の表面に自分の、裏面に息子コンスタンティノスの肖像を彫らせた<633>。

### 5. コンスタンティノス 5 世 (741-775) の場合

コンスタンティノス 5 世は即位後 750 年までに鑄造させた貨幣には、その表面に自分の肖像を彫らせたが、裏面には父帝レオ 3 世の肖像を彫らせた<637>。また 751 年以降に鑄造させた貨幣には、表面に自分と息子レオ 4 世の肖像を、裏面には父帝レオ 3 世の肖像を彫らせた<638>。ここに親子孫 3 代にわたる肖像が 1 枚の貨幣に現れたことになる。

### 6. レオ 4 世 (775-780) の場合

レオ 4 世が鑄造させた貨幣には、その表面に自分と息子コンスタンティノス、裏面に祖父帝レオ 3 世と父帝コンスタンティノス 5 世の肖像を彫らせている<638, 640>。ここには 4 代の皇帝の肖像が配列されている。

## 7. ニケフォロス 1 世 (802–811) の場合

ニケフォロス 1 世は治世中に自分と息子スタウラキオスの肖像を彫らせた貨幣を鑄造させたといわれている<700>。

## 8. レオ 5 世 (813–820) の場合

レオ 5 世は治世中に貨幣を鑄造させ、そこに自分と息子コンスタンティノスの肖像を彫らせた<702>。

## 9. ミカエル 2 世 (820–829) の場合

ミカエル 2 世は治世中に貨幣を鑄造させ、その表面に自分の肖像、裏面に息子テオフィロスの肖像を彫らせた<764>。

## 10. テオフィロス帝 (829–842) の場合

テオフィロス帝は 830 年あるいは 831 年に鑄造させた貨幣に、表面に自分の肖像をまた裏面に息子コンスタンティノスの肖像を彫らせ<766>、その後 831–840 年に鑄造させた貨幣には、表面に自分の肖像、裏面に父帝ミカエル 2 世と長男コンスタンティノスの肖像をそれぞれ彫らせ、3 代の皇帝を 1 枚の貨幣に登場させている<767>。さらに帝は 831–840 年に鑄造させた貨幣に、表面に自分と妻テオドラおよび長女テクラ、裏面に次女アンナと三女アナスタシアの肖像を彫らせている<768>。また帝は治世末期に鑄造させた貨幣には、表面に自分の肖像、裏面に次男ミカエルの肖像を彫らせている<771>。

## 11. バシレイオス 1 世 (867–886) の場合

バシレイオス 1 世は、867 年頃貨幣を鑄造させ、裏面に自分と息子コンスタンティノスの肖像を彫らせた<774>。

## 12. レオ 6 世 (886–912) の場合

レオ 6 世は 908–912 年頃に鑄造させた貨幣の裏面に、自分と息子コンスタ

ンティノスの肖像を彫らせている<777>。

### 13. ロマノス1世(920-944)の場合

ロマノス1世はコンスタンティノス7世(913-959)の義父となったが、その治世中に貨幣を鑄造させ、裏面に自分とコンスタンティノス7世の肖像を並べて彫らせていた<780>(920年)、<781>(920, 944年)、<783>(921, 931年)、<787, 788>(945年)。またロマノス1世は自分とコンスタンティノス7世に実子クリストフォロスを加えて3人の肖像を彫らせたこともあった<782>(921年頃)、<784>(931年頃)。

### 14. エウドキア・マクレンボリティッサ(1067, 1071)の場合

エウドキア・マクレンボリティッサは2度統治したが、1067年の統治の際にはすでに亡夫コンスタンティノス10世との間に6人の子を得ていた。そして短期ではあったが、最初の治世中に貨幣を鑄造させ、その裏面に自分と長男ミカエルおよび三男コンスタンティノスの肖像を彫らせた<922>。

### 15. アレクシオス1世(1081-1118)の場合

アレクシオス1世は1092年に貨幣を鑄造させたが、その表面には息子ヨハネスがクリストより戴冠されている像を、また裏面にはアレクシオス自身と妻イレネの肖像を彫らせている<1031>。

### 16. アンドロニコス2世(1282-1328)の場合

アンドロニコス2世は、1294年以降1320年まで息子ミカエル9世と共同統治の形をとったが、この間に鑄造させた貨幣には、その裏面に自分とミカエル9世の肖像を彫らせている<1304, 1305, 1306, 1307>。またアンドロニコス2世は1325年から1328年までに鑄造させた貨幣には、その裏面に自分と孫のアンドロニコスの肖像を彫らせている<1308, 1309>。

以上グリエルソンの収録したビザンティン帝国貨幣を、おもにコンスタンテ

イノポリスで鑄造された金貨を中心に見てきた。ここで考えねばならないことは、皇帝の肖像がなぜ貨幣に彫られたのかということである。貨幣とは言うまでもなく、本来は品物を交換する場合にその機能を発揮するものである。つまり貨幣の本来的機能は物資流通の際に経済的側面において見られるものである。そのほかに物資の価値を数字で以て示すという、価値評価の尺度としての機能をも持っている。そして貨幣がこれらの経済的機能を効果的に発揮するためには、貨幣の通用範囲がより広いことが求められる。

これら貨幣の流通範囲が広いことは、それだけ多くの人々の目に触れることになる。この貨幣の流通範囲の広さに注意すると、貨幣はまたそこに彫られた図像を広い地域の人々に知らしめるという広報的な機能をも持っていたといえる。この貨幣の広報的機能に着目すれば、各皇帝は自分の肖像をそこに彫らせることによって、皇帝として自分の存在をその支配圏に周知させることが可能になる。その意味でビザンティン帝国では、皇帝はその即位直後に銘々自分の肖像を貨幣に彫らせ、帝国各地に散布させたと考えられる。

## Ⅱ．皇帝親子肖像の諸問題

叙上のとおりビザンティン帝国では、少なくとも 16 人の皇帝がその鑄造した貨幣に、自分と子供の肖像を並べて彫らせていた。いまこれらの貨幣について、①皇帝親子肖像の形態、②鑄造時期、③鑄造年代および④鑄造における皇帝の意識などについて考察してみたい。

### ① 皇帝親子肖像の形態

貨幣に彫られた親子肖像の主たるものは、現職皇帝とその息子であった。たとい皇帝に息子と娘がいた場合でも、息子しかも長男のみを貨幣にその肖像を彫らせた場合が多かった。たとえばアレクシオス 1 世 (1081-1118) は 3 男 3 女の子供をもったが、実際に貨幣に肖像を彫らせたのは自分と妻イレネそれに長男ヨハネスの 3 人であった。次男アンドロニコスと三男イサキオスの肖像は

彫られていない。しかしなかにはテオフィロス帝のように自分と妻および3人の娘の肖像を彫らせた場合もあった。またエウドキア・マクレンボリティッサのように、女帝が息子の肖像を合わせて彫らせた例もあった。これらはむしろ例外的な場合と考えられ、皇帝親子肖像の主流はやはり皇帝の親子ともに男性であった。ただ先任皇帝の肖像を合わせて彫らせた貨幣もあり、その例としてイサウリア王朝とアモリア王朝の貨幣があげられる<sup>(3)</sup>。

親子肖像に彫られた「子」は、すべて実子であった。実子をもたない皇帝は、たとい娘をもち、その結婚相手に皇帝位を譲ったとしても、娘の夫の肖像を貨幣に彫らせたことはなかった。たとえばコンスタンティノス8世(1025-1028)は息子がなく、エウドキア、ゾエ、テオドラの3人の娘をもち、ゾエをアルギュロス家のロマノスと結婚させ、彼に皇帝位を譲ったが、貨幣にはゾエもロマノスの肖像をも彫らせていなかった。またこのゾエは夫亡き後、バフラゴニア出身のミカエル4世(1034-1041)と再婚したが、彼との間に子がなく、夫の治世中に彼の甥ミカエル5世を養子に迎えた。しかしゾエとミカエル4世はミカエル5世(1041)の肖像を貨幣に彫らせることはなかった。またアレクシオス3世(1195-1203)も息子がなく、イレネ、アンナ、エウドキアの3人の娘がいたが、彼女たちの肖像をその貨幣に載せることはなかった。ただしロマノス1世の場合は、娘ヘレナを現職皇帝コンスタンティノス7世(913-959)と結婚させた関係から「皇帝の義父」の立場についた。そのため貨幣には、自分の肖像に実子クリストフォロスと義子コンスタンティノス7世の肖像を合わせて彫らせていた。なおバシレイオス2世はじめ、実子をもたない皇帝はあえて他人の子供を貨幣に肖像として彫らせることはなかった。

## ② 鑄造時期

皇帝親子肖像が彫られた貨幣が、子供の何才の時に鑄造されたのか。この問題は皇帝親子肖像の貨幣鑄造の意味を知る上で重要である。そのために皇帝の子が、生後どの時期で貨幣にその肖像を表したのかを確認する必要がある。いま皇帝の子の肖像が初めて貨幣に現れた鑄造時期および当時の子の年齢を一覧

すると次のようになる<sup>(4)</sup>。

なお○印は親皇帝の即位以後に産まれた子を指す。

皇帝の子	生年	鑄造時期	子の年齢	親皇帝
コンスタンティノス	612. ○	613-616	1~4 才	ヘラクレイオス
ヘラクロナス	626. ○	632-635	6~9 才	ヘラクレイオス
コンスタンティノス	650. ○	659-661	9~11 才	コンスタンス 2 世
ティベリオス	704 頃	705-711	1~7 才	ユスティニアノス 2 世
コンスタンティノス	718. ○	720-725	2~7 才	レオ 3 世
レオ	750. ○	751-775	1~25 才	コンスタンティノス 5 世
コンスタンティノス	771.	776-778	6~8 才	レオ 4 世
スタウラキオス	不詳	802-811		ニケフォロス 1 世
コンスタンティノス	不詳	813-820		レオ 5 世
テオフィロス	812.	821-829	9~17 才	ミカエル 2 世
コンスタンティノス	不詳	830-831		テオフィロス
ミカエル	840. ○	843-856	3~16 才	テオフィロス
コンスタンティノス	859.	868-879	9~20 才	バシレイオス 1 世
コンスタンティノス	905. ○	908-912	3~7 才	レオ 6 世
コンスタンティノス	905.	920	15 才	(義父)ロマノス 1 世
クリストフォロス	不詳	921		(実父)ロマノス 1 世
ミカエル	1050.	1071	21 才	エウドキア
ヨハネス	1087. ○	1092	5 才	アレクシオス 1 世
ミカエル	1277.	1294-1320	17~43 才	アンドロニコス 2 世

なおアンドロニコス 2 世は、その孫アンドロニコス 3 世との肖像を併記して貨幣に彫らせたが、本論で扱う「親子肖像」ではないので、ここではその掲載を控えた。

以上 19 人の「皇帝の子」について、その肖像が貨幣に現れた鑄造年代と子の年齢についてみたが、そううち 7 人については生後 1 年乃至 10 年の間にその肖像が貨幣に現れている。これは皇帝が即位後に生まれた実子については、出



生後ただちに皇帝親子肖像を貨幣に彫らせたものと考えられる。10才を過ぎて初めて貨幣に肖像を彫られたものについても、親皇帝の即位年代との関係においてみると、親皇帝は即位後早い時期に貨幣を鑄造させ、そこに息子の肖像をも合わせて彫らせたと考えられる。もちろんいま貨幣の鑄造年代をより厳格に特定できない事情もあるが、それにしても皇帝は即位後に自分の子が生まれると、できるだけ早い時期に息子の肖像を貨幣に彫らせたことが考えられる。なおユスティニアノス2世の子ティベリオス、レオ5世の子コンスタンティノス、バシレイオス1世の子コンスタンティノス、ロマノス1世の実子クリストフォロスの4人は皇帝になれなかった。

### ③ 鑄造年代

ビザンティン帝国における皇帝親子肖像の貨幣の鑄造時期を、「皇帝の子」を基準に世紀別に見ると、7世紀3人、8世紀4人、9世紀6人、10世紀3人、11世紀2人、12世紀なし、13世紀1人、14世紀なし、15世紀なしとなる。ここにあげた事例そのものが、わずか19人であるので、これを以て鑄造年代の分布状況を論ずることは必ずしも妥当とは言えない。しかしよくみると、19人中13人までが7世紀から10世紀までの4世紀の間に集中していることが指摘できる。これを王朝別に見れば、ヘラクレイオス王朝(610-695)、イサウリア王朝(717-802)、アモリア王朝(820-867)、マケドニア王朝(867-1056)の4王朝の時期にあたる。残り3人については、ドゥカス王朝(1059-1081)、コムネノス王朝(1081-1185)、パライオロゴス王朝(1261-1453)の各王朝にそれぞれ1人ずつ現れたに過ぎない。したがって皇帝親子肖像の貨幣は、帝国の歴史のなかにおいてその前半に多く見られたということになる。

では帝国の歴史において、皇帝親子肖像の貨幣がその前半において多く、後半において少ない現象をどう理解するかという問題になると、必ずしも適切な答えが出てこない。ただ帝国の領土問題についてみると、前半においてはヘラクレイオス帝以来のバルカンと小アジアを基本的領土とする体制が維持できていた。それが11世紀後半になると、東方よりセルジューク・トルコ次いでオス

マン・トルコによる小アジアへの侵略があり、また西方ではノルマン人によるシチリア、バルカンへの侵略があり、以後帝国の領土は縮小の道をたどった。こうした帝国領土縮小のなかで、とくに小アジア側では各地の武将がその勢力を競い、皇帝は各武将の勢力均衡の上に立ったうえで、はじめて自己の地位を維持できたのであった。その意味で皇帝は各地の武将との勢力均衡を保つ関係上、自分の息子の肖像をただちに貨幣に彫らせることが難しくなったとも考えられる。

#### ④ 鑄造における皇帝の意識

ビザンティン帝国の歴史のなかで、その前半にあたる7世紀から11世紀に至る間に即位した延べ50人の皇帝のうち、14人の皇帝が皇帝親子の肖像を貨幣に彫らせた。しかも貨幣の鑄造は、各皇帝とも即位直後あるいは子の出生直後の比較的早い時期に着手したものと考えられる。そしてその貨幣に現れた肖像は、ほとんどが皇帝自身と実子である。

このことはこれらの皇帝にとって、「皇帝位とは自分の息子に継がせるべきものである」というある種の皇帝位継承観があったのではないかと思わせる。皇帝は即位するにあたって、それぞれの事情をもっていた。しかしいったん即位した以上は、その皇帝位を自分の次に誰に継がせるかということが、皇帝にとって重要な関心事になる。そこでこれら14人の皇帝は、まず自分の後継者は自分で決めるという姿勢を示したのである。しかもその姿勢を当時の帝国において、広報的機能をもっていた貨幣に肖像を彫らせる形で表現しようとしたのである。そして皇帝の後継者には実子しかも男子を指名した。そこには自分の兄弟やいとこ、あるいは甥・姪などは含まれていない。まして他人は入っていない。したがって皇帝位継承者は直系の卑族、しかも男子に限るといった観念がこれら皇帝の脳裏に秘められていたのではなかろうか。

また皇帝位継承観は「未来形」の形で現われた。各皇帝は自分の次の皇帝のことを考えているのである。自分がどの皇帝から皇帝位を継いだのか、換言すれば過去のことはあまり言及していない。ただコンスタンティノス5世、レオ

4 世、テオフィロス帝の 3 人については先任皇帝の肖像を実子と共に、その貨幣に彫らせている。他の 11 人の皇帝は、いずれも自分と息子の肖像を彫らせている。その意味でこれら各皇帝は、「皇帝の位」というものを、未来に向かって誰に継がせるかを意識したのである。ただ未来を意識するといっても、そこにはおのずから限界が見られた。すなわち皇帝にとって、未来を意識できる人物は自分の子供のみであり、孫の代まで皇帝後継者を指名できるのは実際上困難であった。ただアンドロニコス 2 世のみは、孫のアンドロニコス（3 世）を一度自分と並べてその肖像を貨幣に彫らせた。

しかしこうした皇帝の親子肖像貨幣が、皇帝の代が替わるごとに連続して現れると、そこに皇帝の後継者指名の意識のなかに、ある程度「血統重視」の観念があったのではないかと考えられる。すなわち皇帝は親からその地位を継いだ場合、その地位は自分の実子、しかも男子に継がせることを予測していた。つまりこの段階において皇帝の脳裏には、皇帝位は「血のつながったもの」の間で継がれるべきである」という意識があったことが推測できる。

そしてこの血統重視の観念をさらに推し進めていくと、そこには同時代の皇帝にもある程度王朝形成の概念があったことが推測される。例えばヘラクレイオス帝とコンスタンス 2 世、1 人おいてユスティニアノス 2 世をつなぐとそこにヘラクレイオス王朝（610-695）の存在が見られる。同じようにレオ 3 世からコンスタンティノス 5 世を経てレオ 4 世へ、さらに子の肖像は彫らせていないが先任皇帝の肖像を彫らせたコンスタンティノス 6 世の貨幣を含むと、そこにはイサウリア王朝（717-802）の存在が見られる。またミカエル 2 世とテオフィロス帝の貨幣をつないでみると、アモリア王朝（820-867）の存在が見られる。さらにバシレイオス 1 世、レオ 6 世、ロマノス 1 世の貨幣をつないでみると、いわゆるマケドニア王朝（867-1056）の前半部が想像される。なおアンドロニコス 2 世による息子および孫との肖像貨幣の鑄造は、パライオロゴス王朝（1261-1453）の初期におこなわれたものである。

## 結 語

ビザンティン帝国では、その歴史のなかで71人の皇帝が登場し、再統治や共同統治などを含めて78回皇帝が交替した。その交替の様式には血縁による交替(41回)、同族による交替(5回)、縁組による交替(11回)および他人による交替(21回)の4種類が見られた<sup>(5)</sup>。このなかで血縁あるいは他人による交替をおこなった皇帝のうち、16人の皇帝がその鑄造貨幣に「皇帝の親子肖像」を彫らせたのである。これらの皇帝は帝国の歴史において、時代的には前半に偏り、またその現れ方はかならずしも連続していなかったのであるが、皇帝位は将来自分の子に継がせるべきであるという、「血統重視による王朝形成」の概念があったと推測された。

ただここで「血統重視」の概念をもち出すと、それはどのような根拠に基づいているのかという問題が新たにおこる。この問題は稿をあらためて考察しなければならないが、ここでは皇帝親子肖像の貨幣を鑄造させた皇帝のなかで、王朝の開祖といわれた4人の皇帝について概観しておきたい。まずヘラクレイオス帝はカッパドキア地方の名門の出身であり、父で同名のヘラクレイオスのもとでカルタゴで軍役に服し、610年フォーカス帝を倒して即位した。レオ3世はゲルマニケイアの出身であり、アナトリコン・テマの軍司令官を歴任した後、アナスタシオス2世を倒して717年即位した。ミカエル2世はフリュギア地方のアモリオン出身であり、コンスタンティノポリス防衛軍団のひとつエクスキュビトス軍団に所属したが、レオ5世を倒して820年即位した。バシレイオス1世はバルカン半島東部のアドリアノポリス西方の貧農の出身であり、コンスタンティノポリスに来て軍団に入り、「厨番の長」に出世した後、867年ミカエル3世を倒して即位した。彼ら4人に共通していえることは、いずれも軍役経験者であり、前任皇帝を倒して即位したことである。その意味で彼らの即位に見える皇帝交代の様式は、他人による交替であった。しかも彼らはその出生時において、時の皇帝権力とは無関係であった。それが軍隊という特定の

人間集団のなかでその地位を上昇せしめて、皇帝の位についたのである。そこには皇帝即位に至るまでの社会的流動性が見られる。

しかしこれらの皇帝がいったん皇帝の位につくと、次の皇帝には自分の息子を指名したのである。するともはやこの段階には自分が即位するに至るまでに見られた社会的流動性は見られない。この点に注意すると、ビザンティン帝国皇帝交替における社会的流動性とその限界が、あらたに歴史的議題として考察の対象となるであろう。

#### 註

- (1) Wroth, W., *Catalogue of the Imperial Byzantine Coins in the British Museum*, 2 vols. (London, 1908, New York, 1960). Grierson, ph., *Byzantine Coins* (London, 1982). Sear, D. R., *Byzantine Coins and their Values* (London, 1987).
- (2) Grierson, Ph., op. cit., 90–94, 90–91, 95–96, 99, 156–157, 164–165, 177–179, 200, 225, 297.
- (3) 杉村貞臣「イサウリア王朝鑄造貨幣における先任皇帝肖像問題」『人文論究』第43巻第2号（1993年）26–40頁。同「アモリア王朝の皇帝交替問題」『人文論究』第34巻第1号（1984年）56–71頁。
- (4) 「皇帝の子」の生年については *The Oxford Dictionary of Byzantium* (New York, 1991) に収録された各皇帝の項目に基づいた。
- (5) Sadaomi SUGIMURA, *A Principle of the Alternation of the Emperors in the Byzantine Empire ORIENT*, vol. 27 (1991), 114.